

トリックスターと魔人とは相まみえず？

— コモロ民話の情報生物学的分析 —

Did the trickster and the Jinn meet? Bioinformatic analysis of Comorian folktales

小田淳一
Jun'ichi ODA

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies

We collected Comorian folktales from the Western Indian Ocean and aligned the motif sequences of these tales using a bioinformatics tool for amino acid sequence analysis and got a phylogenetic tree which shows metaphorically evolutionary relationships among the stories. The aim of this paper is to analyze a minute branching process between the trickster stories and supernatural-being stories by relating the branching process to "logical constraints that reflect laws governing the narrated universe" and "conventions of a particular and characteristic universe of a culture and an epoch" in combinations of motifs following the analytic model of Claude Brémont.

1. はじめに

物語において述部集合から帰納される様々な属性を付与された登場人物の間には「相性」とでも呼び得るものがある。相性はしばしば共出現可能性として顕現し、例えば「桃太郎」と「金太郎」は述部に共通点が多いことから単一の物語の中では通常一緒には出てこない。尤も、想像力／創造力に富んだ(即ち規範志向性が低い)語り手が、両者を組み合わせてみようと思いつくことはあり得る¹。本論考が扱うトリックスターは一般に「攪乱者」という属性を付与されているが、[Lévi-Strauss 1958]やそれを敷衍した[山口 1974]などが指摘しているような、善／悪、権力／反権力といった二元的世界の仲介者にして且つ、相反する属性を有する両義的存在という構造論的トリックスター観からも、彼の相方となる登場人物は自ずと限定されている。本論考は、日常的な語りの実践が現在に残っているコモロの民話を分析対象として、そこに登場するトリックスターと他の登場人物との関わりが構造論的トリックスター像と如何に関わっているかについて、ブレモン分析モデル[Brémont 1966, 1973]を情報生物学のツールに適用させることによって考察することを目的とする。

2. データと分析モデル

2.1 採話データ

本論考のデータは 2008 年から断続的にインド洋西域島嶼部(マダガスカル、レユニオン、グランド・コモロ)や旧宗主国フランス本土に居住するコモロ語話者から採話した物語²のうち、トリックスターを含む主要な登場人物群が現れる民話 36 編である。

連絡先: 小田淳一, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1, Tel: 042-330-5695, Fax: 042-330-5610, odaj@aa.tufs.ac.jp

¹これは、子供が半翅目昆虫の翅(羽根)をむしり取って直翅目に付けようとしたり、危険な混合液を作ることと同次元の異化作用であり、金太郎が登場する RPG 『桃太郎伝説』や米映画『アベンジャーズ』はその好例であろう。因みに「アベンジャーズ」結成の契機となるロキ神は北欧神話のトリックスターである。

²採話総数は現在約 170 で、内 78 話の邦訳を次の URL で公開している: http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/contes_ocean_indien.html

(1) 登場人物の共出現パターンによる物語の分類

コモロ民話の主要な登場人物は次の 3 種である。

- Ibnasya³(トリックスター)
- Mfalme⁴(王)
- Djini⁵(超自然的存在)

これらの登場人物の各物語における出現の有無を 2 値(0/1)で表した単純な対称正方行列を統計解析ツール R のクラスター分析で処理した結果が図 1 である⁶。

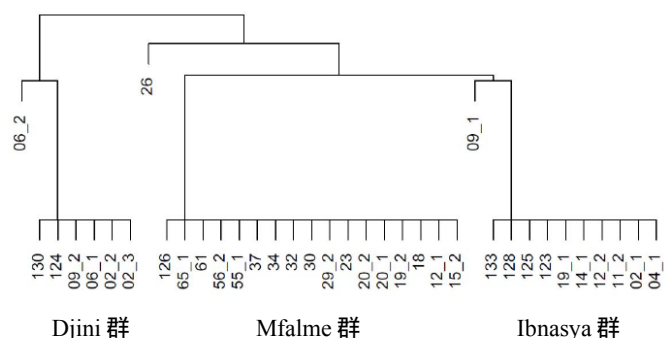


図 1: 登場人物の共出現パターンによる 36 話の分類

³この名には音や表記の揺れが多く(コモロ語には確立した正書法がない)、Ibanawassi や Banawasi 等もある。スワヒリコーストの民話では Abunuwas という名で登場するが、これは実在した、最も偉大なアラブ詩人の一人としばしば称される Abū Nuwās al-Ḥasan b. Ḥānī (813 年頃没)の kunya (あだ名)に由来している。彼は当時のカリフに気に入られたが、酒色と男色に耽る放蕩無頼の徒でしばしば投獄され、WWW 上には彼を「最初にして偉大なイスラームのゲイ詩人」として讃えるサイトが存在する。

⁴この話はスワヒリ語由来で「王」の他に、村の長など一般的な「権力者」の意味があり、通常の仏語訳では sultan とされる。

⁵アラビア語 *ginn* からの借用語であり、通常は「魔人」や「精霊」と訳され、また genie の語源であるとされている。

⁶個体識別子は音源の「トラック番号 + 物語」を表す(例えば、06_2 はトラック 06 の第 2 話)。尚、クラスターと要素間の類似度には群間平均法を使用した。

(2) 各物語群の登場人物

図 1 に示された各物語群における登場人物の内訳は次の通りである。

- Djini 群: 7 話(うち 1 話[06_2]が Djini + Mfalme)
- Mfalme 群: 17 話
- Ibnasya 群: 11 話(うち 10 話が Ibnasya + Mfalme, 1 話[09_1]が断片)

また, 3 人すべてが登場する物語が 1 話(26)ある。

2.2 分析モデルとデータ作成

図 1 は, 06_2 や 26 が外群(Outgroup)であることから, Djini (超自然的存在)が Ibnasya(トリックスター)や Mfalme(スルタン)と一般に「相性」が悪いことを示しており, また, Mfalme 群と Ibnasya 群がひとつのクラスターを形成していることから, 相性の悪さが登場人物の行動域に関わる「現実的=日常的世界/非現実的=非日常的世界」という対立に起因すると解釈することが可能である。しかし, Djini は現在でもなおコモロにおいては日常的に様々な場面で参照される存在であり⁷, そのような対立の他に, 物語の深層構造における, より客観的な解釈可能性を探るために本論考は, 登場人物のエティックな属性を捨象する[Brémond 1966, 1973]の物語分析モデルを援用する。

(1) ブレモン の 物語 分析 モデル

ブレモン の 物語 分析 モデル は 現 在 で は 既 に 古 典 的 で あ る が, 様 々 な 意 味 に お い て 情 報 科 学 と の 親 和 性 が 見 ら れ る⁸。ブレモンはまず, 物語世界を支配する法則として次の二つを指定する。

- 「語られている世界を統御する諸法則を反映した論理的拘束」
- 「ひとつの文化, ひとつの時代の, 個別的, 特徴的な[物語]世界の慣習」

つまり, モチーフ群はそれらのいずれか, 或いは双方によって結合する。ブレモンはそれらの法則の検討に際して, モチーフ群の連鎖的結合モデルとしての, 状況の二分法に基づく基本シーケンスから出発する。例えば, 最も単純なタイプの基本シーケンスは次のようなものとなる。

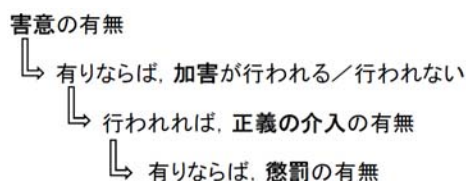


図 2:ブレモン の 基本 シークエンス の 例

図 2 におけるそれぞれの完了項を次のようにコード化することが可能であり, また, シークエンスの二分法的経路は図 3 のように表される。しかし, それによって, このシーケンスに基づくモチーフ連鎖が実際には 5 種しかないことが明らかになる。

⁷ コモロ文化の専門家である文化人類学者の花淵馨也氏(北海道医療大学)から, コモロには自分達を Djini の子孫だとする数々の伝承が残されていることをご教示頂いた。また[Allaoui 2010]は「未だに[コモロの]社会的現実において実践されている魔術的儀礼は Djini という表象に関わっている」としている。

⁸ 尤もブレモン本人の話では, 分析の精緻さを求める自身のモデルが情報科学の手法と類似しているのは, 物語学の内在的な事由による偶然であり, 事実, 彼はモチーフの索引作成にコンピュータを利用する以上のことは考えていないようである。

- M: 害意有り/N: 害意無し
- F: 加害の実行/G: 加害無し
- I: 正義の介入有り/H: 正義の介入無し
- C: 懲罰有り/D: 懲罰無し

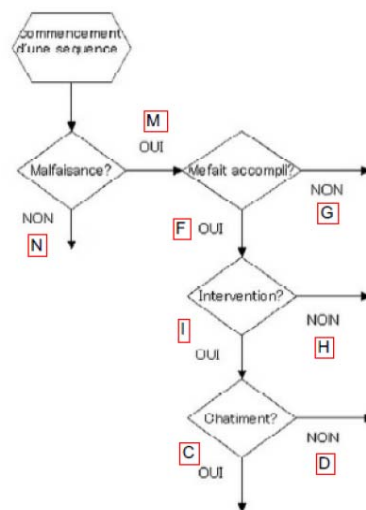


図 3: 基本シークエンスの二分法的経路

(2) データ作成

5 種 の みの モチーフ 連鎖 に 基 づ く 分 析 か ら 有 意 な 結 果 は 得 ら れ ない こと か ら, 本 論 考 で は ブレモン の 「過 程」モ デル か ら 抽 出・敷 衍 し た 次 の 要 素 群 を, 既 に コー ド 化 さ れ た 完 了 項 に 追 加 す る。

- T: 与えられた試練
- E: 一般的な計略
- K: 過度の(死に至る)加害
- L: 過度の(死に至る)懲罰
- P: 僥倖による利益
- R: 懲罰に伴う報奨(一般的な利益)
- Q: 懲罰に伴う報奨(加害者のステータスの篡奪)
- A: 状況の最終的な良性
- Y: 状況の最終的な悪化

これによって分析対象となる 36 話のモチーフ連鎖は図 4 のようにコード化される。

02_1	MTFLIEDA	23	MFKIECLRA
02_2	NGHDY	26	MFHDPA
02_3	NFEHCY	29_2	MTFKIECQA
04_1	MFIECRA	30	NGHDA
06_1	MFIDRA	32	MFICRA
06_2	NTFHCRA	34	NTGHCRY
09_1	MFHDY	37	NGHDPA
09_2	MFICLA	55_1	NGHCY
11_2	MFIECRA	56_2	MFIKCLY
12_1	MTFKIECQA	61	MFIECQA
12_2	MFIECRA	65_1	MFIECLOA
14_1	NTFHDRA	123	MFIECRA
15_2	MFKIECLOA	124	MFHCLRA
18	MFKICLOA	125	MTFIEDA
19_1	MFIECRA	126	MTFIDY
19_2	NTMFHDRA	128	MFIEDA
20_1	MFHICLA	130	NGHERDA
20_2	NTGHDA	133	MFIECRA

図 4: コード化された分析対象の 36 話

3. データ処理と結果

物語シーケンスをその深層構造という観点から分析するひとつの方法は、構成要素の整列によるモチーフ連鎖の分類⁹と、それによって生成される進化系統樹の分岐過程を新たな指標とする再分類の結果を併せて解釈することである。本論考では、整列については情報生物学で一般によく用いられている多重整列プログラム Clustal X を用い、また進化系統樹は、Clustal X が出力する系統樹情報が保存された dnd(デンドログラム)ファイルから TreeView によって作成した。

3.1 モチーフ連鎖の整列と分類結果

図 5 は 36 話のモチーフ連鎖を Clustal X によって整列した結果であり、各個体識別子の先頭に、登場人物の頭文字 [I (Ibnasya)/S (Sultan [= Mfalme])/D (Djini)] が付加してある。

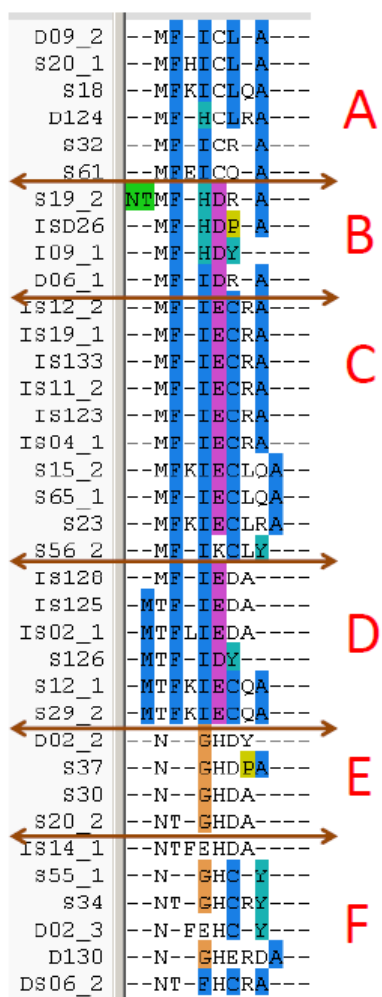


図 5: Clustal X による 36 話の多重整列

整列結果から大まかに区分した A から F までの、それぞれのグループの特徴については詳述しないが¹⁰、各グループに含まれる登場人物ごとの物語群の内訳は次の通りである。

⁹ [小田 2007]は、異文を多く含む同一ジャンルの書承史料について、テキスト表層の文字列を整列することによって、定型的な文言の祖型を推定したものである。

¹⁰ 中には創発的であると思われる物語要素が認められる。例えば、グループ A (6 話) の半数は「結婚」を巡る物語であり、グループ E (4 話) の半数は「糞尿譚」である。

- A: Mfalme 群 (4 話) + Djini 群 (2 話)
- B: Outgroup (26, 09_1) + Mfalme 群 (1 話) + Djini 群 (1 話)
- C: Ibnasya 群 (6 話) + Mfalme 群 (4 話)
- D: Ibnasya 群 (3 話) + Mfalme 群 (3 話)
- E: Sultan 群 (3 話) + Djini 群 (1 話)
- F: Djini 群 (3 話) + Mfalme 群 (2 話) + Ibnasya 群 (1 話)

これらのグループの中で Ibnasya が登場するのは主に C と D であり、そこでは専ら Mfalme との間に二元的世界が構築されており、他グループ内で Ibnasya が登場するのは B の外群 (26, 09_1) と F の 1 話 (14_1) の 3 話である。これらの「例外的」な 3 話のうち 09_1 は友人を騙す¹¹という断片的な物語、また 14_1 は言葉遊び(取り分け狼語)に重点が置かれたものであり、更に 26 は上述したように、Ibnasya と Djini が共出現する(現時点では 3 人の登場人物が共出現する)唯一の物語でもある。尚、この 26 は次のような点においても、他の多くのコモロ民話に共通する要素連続から逸脱している。

- シーケンスの端緒となる「害意」がトリックスターの Ibnasya による
- 通常は人間に害を及ぼす Djini が援助者となっている
- Ibnasya が最後に Mfalme 位に就く

また 26 にはこのような逸脱に加えて、他の物語ににおいては通常は同時に現れない要素連続の断片が幾つか組み合わせられており¹²、それらの異化作用が語り手の規範志向性の低さによるものである可能性は否定出来ない。しかし、Ibnasya と Djini の共出現という例外性を語り手のレヴェル¹³にのみ帰することは些か粗放であり、論理的拘束或いは慣習との関わりを検討する必要があるものの、整列処理自体はその回数によってヒューリスティックにならざるを得ないため、より有意な解釈可能性を探るためには、一意的な測定値である系統樹情報に基づく進化系統樹の参照が有効であると思われる。

3.2 進化系統樹とその解釈

Ibnasya と Djini の非-共出現性をより詳細に分析するために本論考が参照する進化系統樹(図 6)は、Clustal X が出力した系統樹情報を基に TreeView によって作図したものである¹⁴。

¹¹ スワヒリコーストのザンジバルで筆者が採話したスワヒリ語による Abunuwas 物語群には、単に人々 (Mfalme を含む) を騙す笑話が多く、その理由のひとつとしては、ザンジバルではコモロとは異なり民話集や漫画の Abunuwas 物語群が流布しており、トリックスターとしての類型化が進んでいることが挙げられよう。

¹² 断片は次のようなものである：「スルタンの娘を孕ませる」「Djini の住処に入り込み財宝を見つける」「教訓めいた言説を付加して教訓譚とする」。

¹³ Ibnasya と Djini の非-共出現性とは直接的に関係しないものの、グループ B (外群を含むグループ) に含まれる Djini 群の 06_1 も人間に害を及ぼすのではなく「援助者」である Djini が登場する例外的な物語である。語り手の Ibrahim A. (採話時 32 歳のタクシー運転手) が語ったもうひとつの物語 (F グループの 06_2) も、分析したデータ中、Djini と Mfalme が共出現する唯一の例外的な物語であるが、両者は「動作主/受動主」の関係では対峙しておらず(これは 26 でも同様である)、例外性の一因が語り手自身である証左とも言える。因みに語り手の Ibrahim A. は 2 歳でマダガスカルに移って来たことから、彼が語るコモロ民話は或る意味において限定された話者のヴァージョンを継承している可能性がある。

¹⁴ スケールバー (0.1) は「座位あたりの置換数」を示し、同じ長さの枝長があれば、特定の座位で 10%の置換が起こったと推定される「進化距離」を表す。

この図は当該民話ジャンルの進化過程というよりも、モチーフ連鎖における座位 (site) の置換に基づく、非一時系列的な分岐 = 分類結果として見る事が出来る。

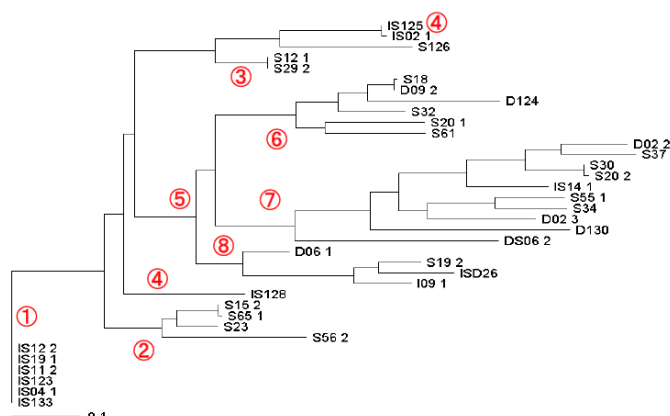


図 6: TreeView による 36 話の進化系統樹

この系統樹の分岐は図 5 の整理結果と当然合致しており、分岐した各グループと整理結果との対応関係を表 1 に示す。

表 1: 整理結果と系統樹の分岐グループとの対応

分岐グループ	①	②	③	④	⑥	⑦	⑧
整理結果	C	C	D	D	A	E+F	B

図 6 において Ibnasya と Djini の非一出現性を、整理結果では捉えられない分岐過程によって再考することが可能となる。即ち、①から④までには Djini がまったく登場しておらず、Ibnasya と Mfalme による定型的な二元的世界 (Mfalme の「加害」に対して計略を用いた「報復」・「懲罰」とそれによる「報奨」) である①から、「加害」と「懲罰」が強調された②、また「報奨」が Mfalme の地位そのものの篡奪に至る③、そして定型的世界の類話である④へと分岐している。ここで注目すべきは、①と同様、Mfalme の加害に機知で対抗し、懲罰を与える物語群である②と③においては、二元的世界の一方の項であるトリックスターという性格を持ちながら「Ibnasya」として明示されない人物が登場することであり、この匿名性は、述部の集合における Ibnasya の諸属性間の類似性を高めており、登場人物としてさほど「差別的」[Todorov & Ducrot 1972]ではないことを示している。他方で、例外的な数話を除いて Ibnasya が登場しない⑥⑦⑧を下位グループとする⑤には、Djini の他にも Mfalme が登場しており、そこで展開される、二元的世界に組み込まれなかった Mfalme や、Ibnasya と共出現することのない Djini の物語群の内容は Ibnasya 群と比較して多様であることから、むしろ、彼らの方が「類似」というコストを削減された矛盾的属性を持つ差別的な存在である。

このように、述部の集合において「無標」であるとも言える Ibnasya が、それを逸脱した行為 (例えば「殺害」など) を行う際に、語り手によって匿名の存在とされることは、その逸脱行為の極限が、二元的世界における対立項としての超自然的存在との対峙であると解釈すれば、両者の非一出現性は、少なくともコモロ民話の物語世界における「論理的法則による拘束」の結果であると言えよう。但し、トリックスターが秩序の破壊や価値の顛倒と同時に「再生」を担うという神話学における一般的な差別的属性がコモロ民話において希薄であることが、文化的偏差レベルで捉えるべき「慣習」に起因するものであるか否かについては他の分析が必要となる。

4. おわりに: 今後の課題

本論考はブレモンの物語分析モデルに基づく基本的なシーケンスを出発点としたが、モチーフ連鎖の要素数を増やすことによって解釈の客観性をより高めることが可能となろう。またそれと併せて、今回扱わなかった登場人物間の「動作主/受動主」関係を、網羅的な述部集合に基づくネットワーク分析¹⁵を用いて分析することにより、物語の二元的世界における対立項の関係を多角的に捉えることが出来るものと思われる。

付記 1

本論考は 2012 年 11 月にフランス共和国海外県のレユニオン島で開催された国際シンポジウム「文化、創造、アイデンティティと表象: 人類学の多元的視点」で行われた口頭報告 [Oda 2012] の一部を大幅に改稿したものである。

付記 2

本研究は JSPS 科研費 23251010 (基盤研究(A)[海外学術調査]) 「インド洋西域島嶼世界における民話・伝承の比較研究」 (研究代表者: 小田淳一) の助成を受けたものである。

参考文献

- [Allaoui 2010] Mounir Allaoui: Les contes de la diaspora comorienne à Majunga et sur l'île de la Réunion, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター・国際ワークショップ「インド洋におけるコモロ民話」, 2010.3.24.
- [Brémont 1966] Claude Brémont: La logique des possibles narratifs, *Communications* 8, pp. 60-76, 1966.
- [Brémont 1973] Claude Brémont: *Logique du récit*, Éditions du Seuil, 1973.
- [Lévi-Strauss 1958] Claude Lévi-Strauss: *Anthropologie Structurale*, Plon, 1958.
- [小田 2007] 小田淳一: 計量分析による疱瘡神の語り証文の伝播分布, 人工知能学会第 2 種研究会ことば工学会資料集 (SIG-LSE-A702), pp. 1-10, 2007.12.13.
- [小田 2011a] 小田淳一: 物語内世界の人物間における二項的関係性のネットワーク構造, 2011 年度人工知能学会全国大会 (第 25 回) 論文集 (CD-ROM: /program/pdf/12.pdf), 2011.
- [小田 2011b] 小田淳一: コモロ人ディアスポラの民話に見る表象群, 高知尾仁編『人と表象』所収, 悠書館, pp. 151-186, 2011.
- [Oda 2012] Jun'ichi Oda: Combinaisons micro-macroscopiques des motifs du récit dans les contes comoriens, Colloque International: Culture(s), création, identités et représentations: un regard anthropologique pluriel, Ecole Supérieure d'Art de la Réunion, 2012.11.21.
- [Todorov & Ducrot 1972] Todorov, Tzvetan & Oswald Ducrot: *Dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, Éditions du Seuil, 1972.
- [山口 1974] 山口昌男: 今日のトリックスター論, P. ラディン他 (皆河宗一他訳) 『トリックスター』所収, 晶文社, pp. 279-306, 1974.

¹⁵ cf. [小田 2011a] .